様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2023
課題番号：１７Ｋ０２３００

研究課題名（和文）中断された生の残像：死者の写真展示における美学と倫理の問題

研究課題名（英文）Afterimage of the Interrupted Life: Aesthetics and Ethical Issues in the Photographic Exhibition

研究代表者
竹中　悠美（Takenaka, Yumi）

立命館大学・先端総合学術研究科・教授

研究者番号：９０５９９９３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、博物館、美術館、そして国際芸術祭において展示される戦争・犯罪・災害の犠牲者の写真の調査を行い、展示方法とともに展示空間が埋め込まれた社会政治的コンテクストや利害関係も詳らかにしながら、美学的そして倫理的問題を考察した。
その結果、匿名の犠牲者としてではなく、在りし日の人となりを伝える資料と併せて生前写真を展示することで、死のスペクタクル化を回避するだけでなく、個人への共感とともに過去の事件を記憶し、回顧するエビデンスとなること、またそのような展示自体がスペクタクル的展示への批判的考察に基づくことを明らかにした。さらに、被害者の死を不可視にする事例の倫理的問題および文化的意義も論じた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の調査対象である博物館や美術館は、世界中に存在する公共施設で、教育の場であるとともにツーリズムの対象でもある。それぞれの施設は地域の社会やコミュニティと深いつながりを持つとともに、死者の写真展示をめぐる美学的そして倫理的問題意識は世界に共通する課題である。実際に死の視覚表象の問題についての研究が各国で蓄積されつつある中で、甚大な自然災害が多発し、被爆国でもある日本の事例についての学会発表、論文・書籍の出版、そして国際研究集会や美術展の開催による本研究成果の国際的発信には狭義の芸術学を超えた社会的意義が認められるだろう。

研究成果の概要（英文）：This study investigates the photographs of victims of war, crime, and disasters displayed in museums, art galleries, and international art festivals. It examines the exhibition methods and the socio-political contexts and interests embedded within the exhibition spaces, considering aesthetic and ethical issues.
The results reveal that displaying pre-mortem photographs along with materials that convey the lives of the victims, rather than as anonymous victims, not only avoids the spectacle of death but also serves as evidence to remember and reflect on past events with empathy towards the individuals. Such displays are based on a critical examination of spectacular exhibitions. Furthermore, the study discusses the ethical issues and cultural significance of making the victims' deaths invisible.

研究分野：芸術学

キーワード：写真論　美術史　博物館論　展覧会史　視覚文化論　戦争　自然災害　記憶

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景
(1)　多くの犠牲者を出した戦争・犯罪・災害の記憶を主題とする施設は世界各地に開設され続けており、美術館や国際芸術祭などでも同様の主題を持つアートの展覧会が開催されている。本研究課題の「中断された生の残像」とは、そのような場で「追悼」の意とともに展示される犠牲者の生前写真を指す。その方法は、死体写真提示の問題を回避しつつ、われわれ生存者と社会に対して忘れがたい印象を刻みつける。だが、死体や残虐さを避けた展示であっても、そこには倫理と美学が複雑に絡みあう問題が残っている。このような問題に対してどのような議論がなされており、またなされるべきなのかという問題意識から本研究計画は始まった。
(2)　報告者は本研究計画に先立って、科研基盤研究(C)の研究課題「ニューディール政策の FSA 写真プロジェクトにおける〈貧困〉と〈被災〉の表象」(2013～2015 年度）で、1930 年代にアメリカ農務省が大恐慌と自然災害によって困窮する農村部を記録した写真群が、政策プロパガンダとしてマスメディアに流通すると同時に美術界で芸術性を評価されることによって、「大恐慌期アメリカ」さらには「貧しくとも古き良きアメリカ」のシンボルとなって、支援という本来の目的から乖離していく過程を詳らかにした。本研究ではこの FSA 写真アーカイブに間接的ないし暗示的に含まれていた死の表象を、よりグローバルな地域での死者の写真展示の事例へと考察の対象を拡げ、それらを見せることと見ることにおける美学的および倫理的問題へと深めることを目指した。

２．研究の目的
本研究は生前写真による死者の表象に関わる国内外の事例を把握し、重要事例の現地調査と文献調査および先行研究の検討を通して、死者の写真展示が孕む諸問題を展示表象の制度と方法ならびに諸々のコンテクストにおける美的経験と倫理的問題を中心に考察することを目的とした。

３．研究の方法
(1)　本研究に関わる公共施設や美術展・写真展についての情報収集を院生の協力を得ながらヨーロッパと東アジアから開始し、そこから重要かつ渡航可能であった地域の展示施設および国際芸術祭を選択して現地調査を行った。研究を開始した 2017 年度より積極的に国外での調査を行っていたが、2020 年からの２年間はコロナ禍による海外渡航規制のため現地調査が国内に限られた。本研究課題にとって特に重要な事例は美術館・博物館ではベルリンのユダヤ博物館、釜山の国立日帝強制動員歴史館、広島平和記念資料館、国際芸術祭ではベルリン・ビエンナーレ、ドクメンタ、光州ビエンナーレ、釜山ビエンナーレ、越後妻有トリエンナーレ、Reborn Art Festival（石巻)、京都国際芸術祭であった。
(2)　それらの事例を考察するための理論および分析概念を得るために、美術批評、写真論、イメージ論、展覧会史の文献調査を行い、併せて生前写真による死者の表象という本研究独自の視点自体も検証するために①死者の写真提示全般についての先行する議論、②広義の博物館、美術館、芸術祭といった展示制度についての先行研究、③死の直接的ないし間接的要因となった戦争や災害の表象に関する先行研究を参照した。
(3)　オンラインを含む国内外の学会やワークショップに参加して研究ネットワークを拡げ、計画の途中でも調査結果を順次、口頭発表と論文投稿、および一般向けの講演会やレビュー記事でも発表することで早期にフィードバックを得ること、研究期間を２年延長した最終年度の 2023 年には海外からも研究者を日本に招聘して国際研究集会を開催し、本研究の課題を地理的・文化的距離や学術的コミュニティを超えてより広く議論できるよう努めた。

４．研究成果
(1)　死者の写真提示の問題に関する現地調査と文献資料・先行研究によって、国内外の博物館施設における死者の展示は、美術館以外で主に歴史（記念）博物館、人類学博物館、科学博物館で行われているが、その際の展示へのアプローチには大きく①事件のエビデンス、②死のスペクタクル、③個人への共感、④批判的考察の 4 タイプが確認でき、多くの場合それらは複合していることが明らかになった。そして死者の生前写真の展示という方法は、匿名ではなく特定可能な個人を生前の暮らしや人となりを伝える資料やテクストを併せて展示することで、②死のスペクタクル化を回避するだけでなく、③個人への共感とともに過去の事件を回顧する①エビデンスとなり、さらにスペクタクル性が政治性と結びついた先行事例に対して、展示による④批判的考察となる可能性が浮上した。そしてこの批判的考察に死者の展示に関する倫理的な姿勢が集約されていると考えられる。さらに上記の諸博物館は社会政治的な力や利害関係のコンテクストの中に埋め込まれており、諸団体が定期的ないしは不定期に開催する国際芸術祭にはそのことに対する批判的実践という意味合いを強く打ち出しているものも確認できた。また、展示方法に関しては、写真のオリジナルプリントに近いサイズで照明も含めてシンプルなもので、あからさまな美的要素を抑制しようという方向性が確認できるが、それを一度に大量に展示する事例もあり、その場合には見る者が感じる圧倒感というスペクタクル的側面が生じ、展示物から一定

の距離をとらなければ全体として鑑賞できない場合には被写体ひとりひとりの個人への共感が弱まる可能性が認められた。
(2)　立命館大学国際平和ミュージアムの 2018 年春季特別展を企画する機会を得て、IS による迫害を受けた中東の少数民族ヤズディを主題にした「林洋子 写真展:ヤズディの祈り」を花王芸術・科学財団の助成も獲得して、企画・開催した。会場の具体的な作品展示は写真家本人とミュージアムの学芸員に委ねたが、上記の先行研究を踏まえて会場での解説パネルを執筆するとともに迫害された人々の写真とその展示について林氏との対談を来館者に向けて行った。約３ヶ月の会期中に新聞やテレビでも報道され、10,000 人を超える来場があった。
(3)　(1)の先行研究をさらに拡張すべき事例研究として、冷戦期にアメリカの大規模写真展が世界巡回することでオリジナルの社会的政治的コンテクストに各地の地政学的コンテクストが加わって軋轢を生んだ「ザ・ファミリー・オブ・マン」展の東京会場での長崎の原爆による死の展示とその撤去事件を調査し、1950 年代当時の巡回先の一つでもあり、コソボ紛争で NATO から受けた爆撃の跡が残るセルビアのベオグラードで 2019 年に開催された International Congress of Aesthetics で報告した。その場で参加者からフィードバックを得るとともに 2020 年にフィンランドのアアルト大学が発行する学術誌『Popular Inquiry』に査読論文として掲載された。さらにこの事例を GHQ による占領期とその後の社会政治と原子力利用のコンテクストを踏まえて加筆修正したものを一つの章として収載したノッティンガム・トレント大学の Marco Bohr 准教授の編纂によるアンソロジー『Capture Japan: Visual Culture and the Global Imagination from 1952 to the Present』が 2022 年にロンドンの Bloomsbury 社より出版された。
(4)　一方で本研究は、公的には死体写真の展示を避ける傾向にある日本において、自然災害とそれによる人的被害の暗示的な視覚表象を雪害の表象の歴史的変遷として追うことを試みた。そして、近世の出版文化において浮世絵版画が果たしていたジャーナリスティックな視覚表象が写真へと移り、さらに戦後に風土論と結びついた自然と人々との過酷な関係を情緒的な共感で捉える写真表現として広く受容されていく過程を考察し、近年のアニメ映画とも共通する独自の美学を形成していることを 2019 年に武漢で開催された「Communication and Dialogue, The Ninth International Conference of Eastern Aesthetics」にて英語で発表し、英語論文が 2020 年に台湾の学術誌『The Journal of Asian Arts & Aesthetics』に掲載された。さらにその中国語訳が 2022 年に広西師範大学の学術雑誌『東方叢刊』に掲載された。
(5)　本研究計画において国際的な調査と成果発信に努めるなかで、2018 年に死の写真についてのドイツでの第一人者であるブラウンシュヴァイク大学の Katharina Sykora 教授が日本で開催したワークショップにコメンテーターとして招聘されて意見と情報交換を行う機会を得た。また、上述の Bohr 准教授とは東日本大震災の津波に関する映画についての彼の論文を報告者は 2018 年に和訳して学術誌に掲載しており、2022 年のアンソロジーの出版に向けて５年以上に渡る研究協力関係を築くことができた。
そして 2023 年の 5 月に Bohr 准教授およびアンソロジーの共著者で「広島写真」についての章を執筆した大阪公立大学の萩原弘子名誉教授を立命館大学に招き、同じく共著者の立命館大学のマーティン・ロート准教授とカナダとイギリスからはオンラインで共著者が参加して、報告者を含めて６名の登壇者によるブックローンチ・国際シンポジウムを開催することで研究成果を発信した。その他にもベルリン自由大学の東洋美術史研究所の美術史研究者、中国の浙江万里学院やハルピン師範大学のメディア研究者と対面およびオンラインのワークショップを開催するなど、国際的な研究ネットワークを構築することができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 竹中悠美(張憲訳)	４．巻 78
２．論文標題 日本通俗芸術中自然現象與自然災害的交界地帯：以浮世絵和紀實撮影集為例	５．発行年 2022年
３．雑誌名 東方叢刊，広西師範大学出版	６．最初と最後の頁 121-140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 竹中悠美	４．巻 31
２．論文標題 FSA写真アーカイブの政治性とその美学	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本写真芸術学会誌，日本写真芸術学会	６．最初と最後の頁 26-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 竹中悠美	４．巻 6
２．論文標題 日本のアートワールドにおける作品展示の位相	５．発行年 2022年
３．雑誌名 須田記念　視覚の現場	６．最初と最後の頁 23－25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Yumi Kim Takenaka	４．巻 Vol.6
２．論文標題 The Weight of Snow: The Transition in Snowscape Pictures Toward Documentary Photography in Japan	５．発行年 2020年
３．雑誌名 The Journal of Asian Arts & Aesthetics	６．最初と最後の頁 21-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yumi Kim Takenaka	4．巻 2020/1
2．論文標題 The Family of Man in Japan: A Photographic Exhibition for World Peace and Atomic Culture in the 1950s	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Popular Inquiry	6．最初と最後の頁 44-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Yumi Kim TAKENAKA	4．巻 -
2．論文標題 The Family of Man in Japan: A Photographic Exhibition for World Peace and Atomic Culture in the 1950s	5．発行年 2019年
3．雑誌名 21st International Congress of Aesthetics Proceeding	6．最初と最後の頁 1570-1575
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yumi TAKENAKA	4．巻 -
2．論文標題 The boundary zone between natural phenomena and natural disasters in Japanese popular art: Focusing on ukiyo-e and documentary photobooks	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Communication and Dialogue, The Ninth International Conference of Eastern Aesthetics	6．最初と最後の頁 107-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yumi Kim Takenaka	4．巻 Special Issue Vol.1
2．論文標題 Realism and Ethnology in Ueda Shoji’s Photography: Another Aspect of Ueda-cho	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Art Research	6．最初と最後の頁 61-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 ゲイル・レヴィン、竹中悠美訳	４．巻 55-1
２．論文標題 芸術家の遺産と美術館の倫理―信頼が裏切られるとき―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 立命館産業社会論集	６．最初と最後の頁 155-167
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 マルコ・ボア（竹中悠美訳）	４．巻 29巻４号
２．論文標題 無人地帯 No Man’s Zone―津波の余波の中のエッセイ・フィルム	５．発行年 2018年
３．雑誌名 立命館大学国際言語文化研究所	６．最初と最後の頁 145-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　2件／うち国際学会　6件）

１．発表者名 竹中悠美
２．発表標題 『日曜日の散歩者』における「七つの詩」―台湾とシュルレアリスム、あるいは瀧口修造―
３．学会等名 公開ワークショップ：東亜電影中的文化芸術
４．発表年 2024年

１．発表者名 竹中悠美／Yumi Kim TAKENAKA
２．発表標題 「ザ・ファミリー・オブ・マン」における原爆の影／Shadows of Atomic bombings in The Family of Man
３．学会等名 Book Launch International Symposium CAPTURE JAPAN　（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Yumi Kim Takenaka
２．発表標題 Globalization of an art exhibition: Critical responses and a new perspective to The Family of Man
３．学会等名 Challenges and Opportunities: International Forum on the Development of Art Theory in the Era of Great Changes（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 竹中悠美
２．発表標題 FSA写真アーカイブの政治性とその美学
３．学会等名 日本写真芸術学会　関西支部 第４回シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Yumi Kim Takenaka
２．発表標題 Beauty and Burden in Japanese Snowscape pictures
３．学会等名 Freie Universitet Berlin-Kobe University-Ritsumeikan University Joint Workshop on Landscape and New Media in Art, Film and Theatre（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yumi Kim TAKENAKA
２．発表標題 The Family of Man in Japan: A Photographic Exhibition for World Peace and Atomic Culture in the 1950s
３．学会等名 International Congress of Aesthetics（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yumi Takekenaka
２．発表標題 The boundary zone between natural phenomena and natural disasters in Japanese popular art: Focusing on ukiyo-e and documentary phonebooks
３．学会等名 International Conference of Eastern Aesthetics（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 竹中悠美
２．発表標題 植田正治の構成的風景と土門拳のリアリズム風景
３．学会等名 立命館大学国際言語文化研究所重点研究プログラム「風景・空間の表象、記憶、歴史」研究例会
４．発表年 2018年

１．発表者名 竹中悠美
２．発表標題 雪の重み ―濱谷浩の〈風土写真〉にいたる日本の雪景画の変遷―
３．学会等名 立命館大学国際言語文化研究所重点研究プログラム「風景・空間の表象、記憶、歴史」研究例会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yumi Kim Takenaka
２．発表標題 Realism and Ethnology in Shoji Ueda’s Photography: Another Aspect of Ueda cho
３．学会等名 Joint Workshop of Kobe University, Ritsumeikan University and FU Berlin: Landscapes in Art, Theory, and Practice across Media, Time, and Place（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 竹中悠美
２．発表標題 写真展「ザ・ファミリー・オブ・マン」は世界でどう見られたか
３．学会等名 立命館大阪梅田キャンパス講座
４．発表年 2018年

〔図書〕　計5件

１．著者名 Marco Bohr ed., Takenaka Yumi Kim, Miyao Daisuke, Ramona Bajema, Man-tat Terence Leung, Martin Picard and Martin Roth, Jamie Coates, Carrie L. Cushman, Hagiwara Hiroko, Jennifer Coates, Selma A. Purac, Melissa Miles	４．発行年 2022年
２．出版社 Bloomsbury	５．総ページ数 304
３．書名 Capture Japan: Visual Culture and the Global Imagination from 1952 to the Present	

１．著者名 仲間裕子、竹中悠美	４．発行年 2020年
２．出版社 三元社	５．総ページ数 336
３．書名 風景の人間学 ―自然と都市、そして記憶の表象―	

１．著者名 田原憲和、木戸紗織（竹中悠美）	４．発行年 2018年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 320
３．書名 ルクセンブルクを知るための50章（担当：第43章近現代美術―芸術家サークルから、EUの文化都市へ―、コラム12歴史的建造物と美術）	

１．著者名 岡林洋・清瀬みさを編著（竹中悠美）	４．発行年 2018年
２．出版社 晃洋書房	５．総ページ数 288
３．書名 カルチャーミックスII ―「文化交換」の美学応用編―	

１．著者名 神林恒道・ふじえみつる編著（竹中悠美）	４．発行年 2018年
２．出版社 三元社	５．総ページ数 264
３．書名 美術教育ハンドブック	

〔産業財産権〕

〔その他〕

写真展の企画・開催
立命館大学国際平和ミュージアム2018年度春季特別展「ヤズディの祈りー林典子写真展ー」平成 30年4月14日　～　平成 30年7月16日
立命館大学国際平和ミュージアム　中野記念ホール

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会 Book Launch International Symposium CAPTURE JAPAN	開催年 2023年～2023年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
英国	Nottingham Trent University			
ドイツ	Freie Universitaet Berlin			
米国	City University of New York			
中国	湖北大学	武漢科技大学		